

「家庭科の被服」における学生の意識と理解に関する調査研究

著者	岡村 好美, 平田 雅代
雑誌名	宮崎大学教育文化学部紀要. 芸術・保健体育・家政 ・技術
巻	12
ページ	1-6
発行年	2005-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10458/1319

「家庭科の被服」における 学生の意識と理解に関する調査研究

岡村 好美、平田 雅代*

Student Consciousness and Understanding of Clothing Studies

Yoshimi OKAMURA and Masayo HIRATA*

The domestic sciences field of clothing studies has long been viewed as sewing. However, manner of dress exemplifies the fundamental role of clothing as well as functioning as an important means of communication among humans.

In this study, a survey of student opinion was undertaken in order to ascertain their level of consciousness and degree of understanding about the field of clothing studies.

An analysis of survey data showed that students were satisfied with methods of instruction that included both lecture and practical experience as such instruction allowed individual students to experience the satisfaction of not only learning, but also planning and carrying out class assignments by themselves. Analysis also showed that the current low level of student consciousness and understanding acts as an obstacle to the acquisition and application of basic knowledge provided through instruction. Survey results suggest the necessity of creating teaching materials that promote student interest, motivation and knowledge.

1. 緒言

近年の我が国は物がなくて不自由だと感じることもなく日常の生活を送れるが、僅か数十年前までは物資が乏しく、衣服は財産としての価値が認められていた。かつて日本では形見分けの物として衣服が当てられることが多かったが、この慣習も財産意識の現れであると考えられる。したがって当時衣服の製作技術が重要なことと考えられたのは当然であろう。しかし戦後の急速な科学・技術の発展に伴って、衣服素材だけでなく色材や高性能な縫製機器がもたらされ、着装目的に応じた様々な素材や色彩の、さらに、様々なデザインの既成衣服が容易に入手できるようになった。このような状況下では家庭縫製は必要でなくなり、現在では、かつてはどここの家庭にもあったミシンがない家庭が増えている。台所に包丁を置いていない若者が存在する時代であることを考えると、日々の食事さえ作らない者が、衣服を作ることなどあり得ないことは頷ける。また、学習指導要領の改訂に伴って学校現場では家庭科必修の履修時数は減

*宮崎大学大学院

少の一途であり、以前のように被服製作に時間を取ることはままならない状況である。

本来被服の役割は着装することによって意味をなすものである。したがって「被服」学習の焦点を着装に合わせることは本来の目的に合致すると考えられる。着衣が無言のコミュニケーション手段であることは忘れてはいけない事実である。したがって安易に既製服を身につけるのではなく、社会生活を円滑に営むための着こなし方や良好な状態の維持方法などに関する知識は当然必要であると考えられ、被服の学習内容を製作だけでなく、他領域にも向けることは好ましいと思われる。しかし日本人の衣服の平均所持数が他国に比べて抜きん出ていることや死蔵割合の高さを考えると、日本人が前述のような知識を十分に備えているとは言い難いことが推察できる。またさらに、その自覚の有無も懸念されるところである。

衣服に関しては長い間、被服＝「裁縫」＝女の仕事とみなされてきたが、現行の家庭科は、小・中・高校において共修で学習上の男女の差はない。本研究はこれらを前提として「家庭科における被服」についての学生の意識と理解度を明らかにすることを目的としたものである。

2. 調査および方法

2-1 調査方法

調査は宮崎大学の学生148名（男子学生80名、女子学生68名）を対象に、2002年10月から2003年5月に、質問紙形式、集合法により実施した。

2-2 調査内容

2-2-1 学生の意識調査

被服についての学生の嗜好意識とその理由および、被服を4領域（材料・整理・制作・着方）に区分して、好きなあるいは嫌いな領域を調べた。

2-2-2 学生の学習状況・内容理解調査

被服各領域の内容に関する単語をあげて学習記憶の有無を調べた。さらに、市販教材・実習ノートなどに基づいて作成したペーパーテストを実施して、その正解率を理解度とした。

3. 結果および考察

3-1 学生の意識調査

「被服」の嗜好意識調査結果を図1に示す。男子学生に比べて女子学生の場合に好き意識が若干強いようで、全体としては約60%の学生が好きと答えた。

複数回答による好きな理由を図2に、嫌いな理由を図3に示す。好き・嫌いの区別は、内容への興味の有無が最大理由であった。好き・嫌いに関係なく学生は家庭科で取り扱う内容は実生活上役に立つと思っているらしく、「生活に役立つから」は好きな理由の2番目に位置し、「生活に役立たないから」という項目を嫌いな理由として選択した学生はいなかった。また、授業が活動的であることや作品の完成時の感動を伴った授業であることなどを好きな理由としている反面、作業・活動を面倒ととらえた学生は嫌いな理由として

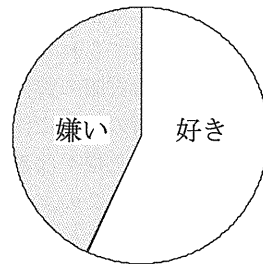


図1 「被服」に対する意識調査

いる。このことは、授業での活動の取り入れ方で嗜好意識が変化することを示唆している。

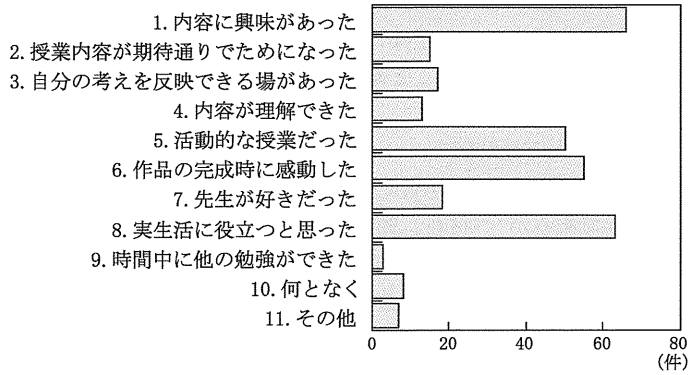


図2 「被服」を好きな理由

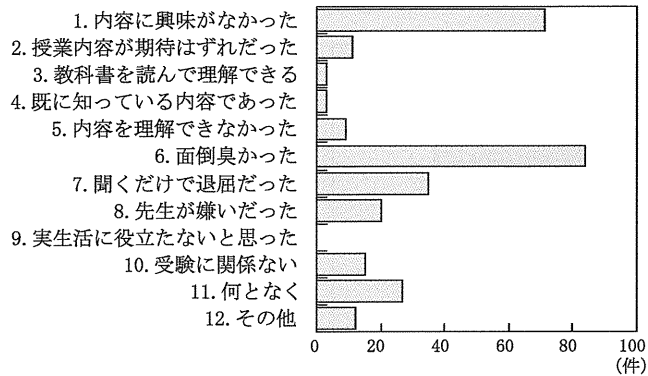


図3 「被服」を嫌いな理由

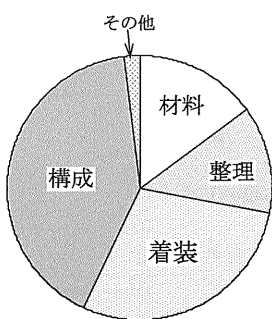


図4 好きな被服領域

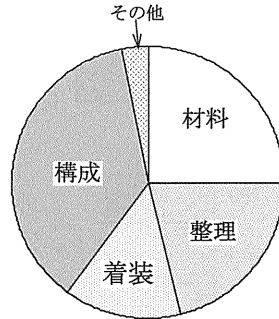


図5 嫌いな被服領域

「被服」4領域の嗜好意識の結果を図4・図5に示す。好きな領域、嫌いな領域共に「構成」が多く、授業における活動のとらえ方が反映した結果であると思われる。また、「着装」の領域を好み、「材料」や「整理」の領域を嫌うことから、理屈など知識として覚えなければならない領域を避ける傾向が推察できる。また、これらの領域では授業展開に活動を伴っていないらしいことも嫌う一因となっていることが察せられ、これは理科離れといわれている現象とも無関係ではないと考えられる。

3-2 学生の学習状況・内容理解調査

図6、7、8、9に被服4領域の学習記憶の有無を示す。「材料」と「整理」の領域について学習記憶が強いようであるが、「材料」領域に含まれる染色の記憶は弱く、「整理」では洗濯方法や汚れ落ちの仕組みを学んだ記憶があるにもかかわらず、界面活性剤という単語名も記憶していない学生がいる状態であった。「着装」領域についての学習記憶は4領域中で最も弱く、たたみ方やコーディネート学習は少ない状況であることが推測された。また、かつて製作は「被服」と同意と考えられていたことや、好き・嫌いの理由の上位に挙げられたことから、経験していない学生はいないと思われたが、調査結果では記憶は比較的弱く、物を作るという意

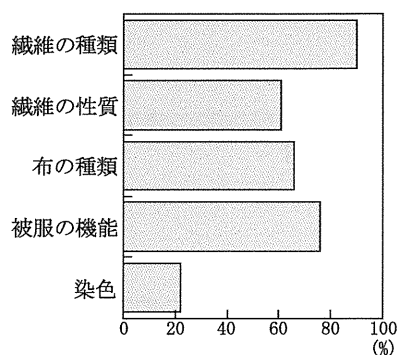


図6 「材料」領域の学習割合

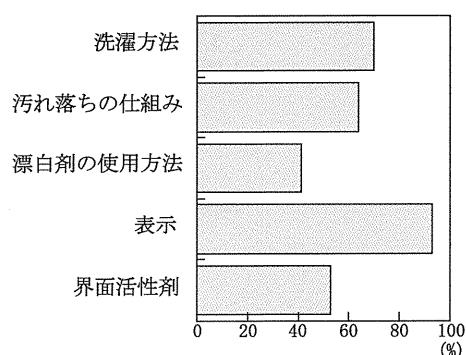


図7 「整理」領域の学習割合

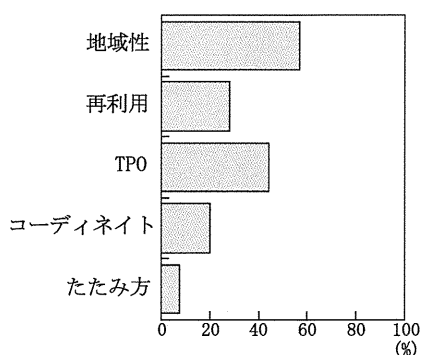


図8 「着装」領域の学習割合

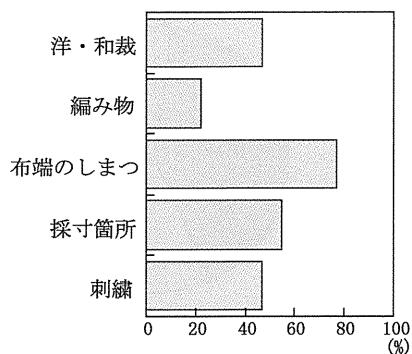


図9 「構成」領域の学習割合

識が学習する内容に勝っている様子が感じられた。このように学習状況の調査結果は前述の好きな領域・嫌いな領域の調査結果と対応しており、領域によって好きあるいは嫌いという意識が生まれたことと無関係ではないと思われる。すなわち、好きと感じる理由として示された達成感が、「材料」や「整理」領域の授業ではなかなか得にくいと思われることや、「材料」・「整理」の領域は実習を伴わなくても成立させやすいために学習指導要領の改訂後はこれらの領域に当てられる時数の増加が嫌い意識をより強く記憶として残したものであると思われる。さらに、「材料」領域で繊維の種類をよく学んでいる反面、繊維の性質や特徴の記憶が弱いことや、「着装」領域の被服形態と気候・風土の関係についての記憶が弱いことから「材料」で学んだ被服素材に関する知識を活かす場がないことも嫌い意識につながる理由であると思われる。また、界面活性剤についてあまり知らない状況であるにもかかわらず洗濯や汚れ落ちの仕組みを学んだと記憶していることから、洗濯過程における洗剤と素材の関係など、洗剤機構を理解していないと思われる。これらのことから、学生の「被服」に関する知識は、領域や項目ごとに独立した知識として考えられており、領域間や項目間の関係が十分理解できていないことが明白である。一方、「着装」領域の学習記憶が弱いにも関わらず好きという意識が強いのは、「着装」についてそれ程多く学んでいないが、視覚的な効果が強い資料の提示などによって興味を誘われたことが良い印象となって好き意識につながったものと思われる。このことより、視覚に訴える授業教材が効果的であると推測できる。

ペーパーテストによる理解度調査の結果を図10に示す。全体的に理解度は低く、学習した知識が身に付いていないことが明らかであった。領域別では「材料」領域の理解度が一番高く、「整理」領域が最も低い状態であった。嫌い意識が強いながらも「材料」領域に関した知識はある程度持っているが、それが応用分野である「整理」には結びついていないことが明らかである。また、好き意識が強く、学習記憶が比較的認められた「構成」領域の理解もあまりできていない状況であった。学生が「構成」領域に求めるものは達成感であったことを考えると、作品を上手く仕上げるために指示されるまま行動し、結果として、方法や作業理由などに関する知識が身に付いていないことが推察できる。これらの結果より学生達は被服における基本と現象の関係を理解できていないことが明白で、これには学習状況が影響していると思われる。

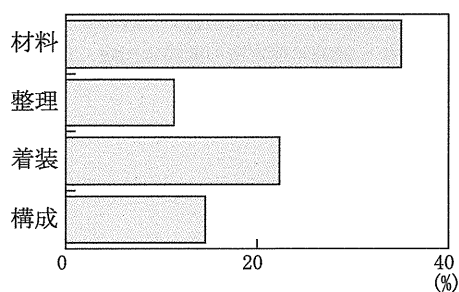


図10 被服各領域の理解度

4. 結論

近年の我が国の生活は物質的に豊かになり、食料に限らず日常的に使用するものを各家庭での生産に頼ることは少なくなってきた。被服についても例外ではなく、着装されている被服は既製服が主流となっている。このような社会状況の変化やそれに伴う学習指導要領の改訂によって、「家庭科における被服」の状況も大きく変化している。

本研究では、「家庭科における被服」についての学生の意識と学習実態を明らかにすることを目的とし、質問紙調査を行った。その結果以下の知見を得た。

- 1) 学生は活動や感動を伴う形態の学習を好む。
- 2) 理解が不十分なために基礎知識が応用領域に活かせていない状況である。
- 3) 今後は視覚を利用した教材開発が期待される。

近年は「能力社会」に変化してきたと言われるが、これは「高学歴社会」であるための言われ方であることも否めない。したがって、教育過程では入試科目以外は軽視されがちになるのは無理からぬことかもしれない。しかし、社会生活を円滑に営んでいくためにはその基本である「家庭」を運営する能力を養うことは不可欠である。この意味から「家庭科」は入試とは関係なく重要視されなければいけない科目であると考えられ、家庭科に課せられた役割が大きいことを、教授者・学習者共に自覚することが必要であると思われる。

参考図書

- ・松沢秀二：繊維の文化誌、高分子刊行会、1993
- ・北山晴一：おしゃれの社会史、朝日新聞社、1991
- ・城一夫：ファッションの原風景、明現社、1998
- ・小林茂雄ほか：衣生活論、弘学出版、1999
- ・日本衣料管理協会刊行委員会：衣料の使用実態、日本衣料管理協会、1989
- ・日本家政学会編：表現としての被服、朝倉書店、1989
- ・大野静枝ほか：衣生活の科学、建帛社、2002
- ・根本行庸：高校家庭科図解資料集、学習研究社、1983
- ・鈴木一行：My Life 家庭資料、大修館、2001
- ・斉藤弘子ほか：資料 家庭一般、実教出版、1997
- ・宮崎県中学校教育研究会 技術・家庭科部会編：宮崎県 中学校 技術・家庭科ノート 家庭分野、宮崎県中学校教育研究会 技術・家庭科部会
- ・日本化学繊維協会企画 松本喜代一指導：教材ビデオ「繊維ってなんだろう」、日本化学繊維協会
- ・一橋出版企画 樋口哲子監修：教材ビデオ 縫い方の基礎、一橋出版
- ・1997年～2002年検定済の開隆堂出版、東京書籍、実教出版、大修館書店、一橋出版発行の教科書